

10年後のぱれっとの ビジョンを描く②

～ ぱれっと勉強会スタート！

10月22日（土）、スタッフ全員参加の令和4年度第2四半期理事会があり、午後から理事・ぱれっと親の会・スタッフ合同の勉強会を3年ぶりに開催しました。総勢29名で「自立」をテーマにしたグループワークを中心に、障がいのある彼らの「自分らしい自立」を目指すには何が必要か、生きづらさや親離れ子離れも含め彼らの生き方の未来像とぱれっとのビジョンを重ね合わせながら10年後を見据えぱれっとが何を指すのか、ステークホルダーの方たちと共に方向性を定めていきます。

●「選択肢を増やす」という発想

40年間の歩みを振り返った時、ぱれっとが大事にしてきたものとして、知的に障がいのある彼らを中心に、本人たちの意見を尊重しながら彼らが主役となり、親や支援者だけで抱え込まない、社会に委ねる姿勢が常に事業の柱にありました。

彼らにとって生活の身近なものとして「余暇」をテーマに取り上げ「たまり場ぱれっと」を立ち上げたのが1983年です。勉強会前半に全体ワークを行ない、ぱれっと創設者の谷口奈保子氏からたまり場ぱれっとの開設から6セクションの立ち上げまでの変遷をたどりながら、ぱれっとの原点は何処にあったのか、ステークホルダーの方たちとともにぱれっとの理念を共有する時間を取りました。

ぱれっとは来年40周年をむかえます。その先の10年（50周年）を見据えどういった方向で事業展開していくか、今年1年をかけて理事・ボランティアや当事者・父母も交え勉強会を開き、当事者のニーズに即したビジョンを描いていきます。

各セクションの歴史には、その時代ごとの当事者のニーズもさることながら、「世の中おかしい」と思えることや、「こうあったら彼らが豊かに生きられる」といった思いがセクションの立ち上げにつながっています。彼らにとっての選択肢を増やしていくことがぱれっとのミッションの一つでした。

●歴史を作り上げてきた人たちの話し

このコロナ禍でぱれっと関係者一同が顔を合わせて話し合う機会が中々持たず、創設者の話を聞く機会も今となっては殆どありません。みなさんにとって、ぱれっとのルーツを知ることで、いかに「福祉の発想」が時代の先を行っていたかが理解できません。現場スタッフ（理事長・事務局長除く）の職歴平均は約3年半です。しぶや・ぱれっとホーム（2016年）ができてから入職したスタッフが殆どですから、ぱれっとの歴史の1ページも経験していない中で、時代の流れや変化を肌で感じてきた我々歴史を知る人間からすると、今後のぱれっとの在り方を同じ土俵で語ることは難しいと感じています。

創設者の立ち上げのきっかけや事業展開、その時代を共にしたスタッフや親・ボランティアの人たち、海外を含めた人種を超えてのつながりなど、40年の事業歴史だけではなく創始者の紆余曲折に耳を傾けることは、新しい時代を担う若いスタッフや

親にとって極めて貴重な話となります。今では谷口氏の講演会はなくなりましたが、その当時は入職したスタッフは積極的に講演を聞きに行くようにしていました。

●勉強会のテーマ「自立」

福祉制度や法律・サービスなど昔に比べかなり変わってきています。グループホーム(GH)が少ない時代は、親亡き後をどうするかが主眼となり、GHを要望する運動が活発でした。今は制度も拡充し、親亡き後の暮らしの面での心配は少なくなってきたように感じます。GH自体が選べる時代にもなり、慌てて将来の生活に不安を抱えることもなくなってきました。

しかし、暮らしの選択肢がGHだけになっていないか、親の意向で本人がGHしか選べない状況になっていないか、本人が望む生き方が選べるような「自立の在り方」を考える目的で勉強会のテーマを「自立」としました。親子関係については昔から、親離れ子離れができていないと言われていいます。本人の自立を妨げているのは、もしかしたら親自身の意識の在り方かもしれません。自立の在り方考えるプロセスを踏むことで、その人の生き方にどう向き合うかが親も含めて問われています。

●自分らしく生きるために

勉強会の後半は7名ずつ4つの島を作りグループワークを行ないました。前半では、まず障がいのあるなしに関わらず私たちがどのように自立してきたか、成長するにしたがい意識変化の中でどういったアイデンティティの確立があったのかを思い返しました。親元を離れたとき精神的自立があり、就職し家庭を築いた時に経済的社会的自立に達したという話を聞きました。後半は、障がいのある彼らの成長に伴った

自立意識の変化について、子育ての中から親目線での意見をいただき、幼少期から就労までの生活の変化から本人なりの自立があったと、新たな気付きがありました。

本人の意思の汲み取り方は人によって様々で、如何に本人が楽しく過ごしているか、「幸せ満足度」という事ではありませんが、感情を汲み取りながら経験値を上げていき自己実現を目指すところに本来の自立があるという意見がありました。一人で自立するには乗り越えるものが多く、周りからのサポートを受けながら本人を中心としたチームづくり、その人に興味関心がある人が周りにいることでの安心感が自分らしく生きることへつながっていくのではないかという、新たな社会変革の基となる親の立場からの強い思いが感じられました。

●親の会から参加者の感想

はじめに、谷口さんからばれっとのこれまでの経過についてお話いただき、改めてばれっとについて振り返るよい機会となりました。今回の勉強会では「自立」について、理事・職員・親とで話し合いができ大変有意義な時間となりました。印象に残ったことは、これまで制度の枠に当てはめようとしていなかったかという反省と、制度の枠の外側にあるコミュニティや地域の受け皿があるのではということ、そしてそれが地域で自分らしく生きていくということに繋がるのでは、ということです。また、本人の意思決定が大切であり、その為の意思決定支援が重要であると改めて再認識しました。この先ばれっとが目指すものに親として微力ながら協力していきたいと思っています。そして、障がいのある人にとってグループホームだけではない新たな暮らし方が拓けるのではと期待しています。

ばれっと親の会 田代真紀子

はじめに谷口さんからぱれっとをつくることになった経緯、思いなど直接うかがいとても心を動かされました。ネットや書籍からでは感じることでできない熱量のようなものが伝わったからかもしれません。その後のグループワークではそれぞれの視点から「自立」について考えました。集まったメンバーは年齢、職業、環境など様々です。共通しているのは、「障がいのあるもの」に関わっている、または関心があって「よりよい生活を実現するにはどうしたらいいか」考えているということ。関わる施設での様子から、我が子の生活ぶりから感じることで、ちょっと客観的な立場の視点から…それこそ多様な視点で「自立」について考えました。制度的に整えなければいけない問題、障がいのある人本人の意識をどうつくって支えていくか課題はあるかと思えます。でも、いつも真ん中に障がいのあるものを置き尊重し考えあうこのような場があることに未来を感じます。

ぱれっと親の会 向井直子

「本人の望む選択肢」「自由な発想」「意思決定」。学生時代には娘の足りないスキルを補うべく訓練を重ねさせ、人に迷惑をかけず、級友から疎んじられぬよう、「できる事」より「出来ない事」をリストアップしてはクリアさせる事に注力してきた私にはとても参考になる勉強会でした。娘に自分で考えさせる前に親の思惑へ誘導していたのではないかと、「やってみなければ分からないじゃない。」谷口さんが心からそう信じて発する言葉に、これまでの自分の決めつけを反省しました。見学した複数の事業所の中から娘自身がおかし屋ぱれっとへの就労を希望し、日を追うごとに自信を持って働き、自己肯定感を持てた事は、家族の最大の驚きと喜びです。ぱれっとが10年後のあ

るべき姿を模索する過程に在籍する娘自身にも、自分の10年後を思い描いて欲しく、双方の発展と成長がどこかでリンクする素敵なアイデアがないものかと思案しております。

ぱれっと親の会 福富京子

●つなげよう未来に

谷口氏のお話しの中での印象的な言葉です。「人間関係・人間性の豊かさは人とのつながりから生まれる。それがぱれっとで大事にしてきたもの」「障がいのある人たちの多様な働き方や暮らし方を考えた時に、一人ひとりが尊重される社会がその人の自立につながる」「独りよがりではなく、色々な人の豊かな発想に触れ多様な分野の人の知恵を借り支えてもらうことでこの40年間のぱれっとの歩みがあるのです」

福祉制度が進み制度に委ねることが多くなりました。しかしその陰で制度に縛られることにより豊かな発想が生まれにくくなっています。

スタッフは日々楽しく仕事ができているか、谷口氏からの問いかけがありました。豊かな人間関係がなければ仕事は辛くなるばかりです。インターネットやスマートフォンが普及する世の中において直接人と話をするのが如何に大事か、問われているように感じました。

みなさんの感想を読むにつれ、ぱれっとの未来に期待されていること、共に時間を共有していることに希望に満ち溢れていることが伝わってきます。ぱれっとの理念が彼らや親に大きな変化をもたらしていることに気づきがあったことが今回の勉強会の大きな収穫です。

今回は、本人を取り巻く自立の在り方について深掘し、共に10年後の未来像を描きたいと考えています。理事長 相馬 宏昭